

Eureka VII

六年制通信 No.24 令和2年11月13日(金)号

文理の別

文系理系の区別はいつ頃できたのでしょうか。私たちが答えられなくてはいけないのですが、残念ながらよくわかりません。私自身、高校生の時にはすでに文理の別がありました。ただ当時は（もう40年以上前のことですが）、文系だから数Ⅲは必要ないなどと先生方は言っていなかったように思います。今は数学や理科の指標によって文理を選択していますし、いわゆる大学の偏差値も文理別に出ています。しかし、芸術系のように文理の別になじまない学部もありますよね。受験科目に数学がどこまで課せられるか、理科は何科目あるかで一応文理を判断しているようですが。

私は文理の別というのは世の中をどう見るかという態度の違いだと考えています。

理系は数学や物理に代表されます。これは人間の物差しとは無縁の世界で、私たちが何を感じどう考えるかには左右されません。普遍的な法則を見出すことによって森羅万象を把握する学問でしょう。ですから時代や場所によって左右されません。もちろん人間の歴史や文化には関係なく、見出された真理は常に正しいわけです。時代が変わろうと、真理は一つ、これが理系の特徴でしょう。

文系は人間の感性を絶対的な基盤としています。主体は人間です。従って、時代によって国や地域によって、その文化によって正しいとされるものは変わります。俳句一つ取り上げても、そもそも外国語に正しく翻訳されることはないでしょうしね。外国の人にはわからない、あるいは説明の非常に難しい伝統が、それぞれの文化圏にあります。文学の評価も、そこには人間の判断が入ってきます。審美眼ということですが、それは時代とともに変わることがあります。自分の見出した真理は、ひょっとしたら自分だけのものかもしれません。しかもその心理は年齢とともに、まるで食べ物の嗜好が変わっていくように、変化していくことがよくあります。これが文系の特徴ではないでしょうか。

理科学的な真理は文明を発展させ、文科学的な真理は文化を育む、これ、誰の言葉でしたっけ。個々人によって判断が違う、これは日常的に私たちが経験することです。人によって感性は違うのですから当然ですが、ということは、私たちは文系的な世界に生きていると考えていいのでしょうかね。恩師に「面白いから読んでごらん」とすすめられた本を全く面白くと思えなかったりしても（自分の浅学非才が原因ということは、この際置いておいて…）、絶対的な「面白さ」が証明されていない世界では仕方ないのかもしれません。これがまた自分が歳をとって読んでみると面白かったりするので、文系の世界というのは本当に何が正しくて何が間違っているのか、わか

りにくいですね。

「黄金律 Golden Rule」のように世界中の人々が納得し大切にしているものでも、そうではないという人もいます。「黄金律」とは「自分がしてほしいと思うことを他人にもしなさい」ということで、「してほしくないことをしてはいけない」と言っても同じことです。新約聖書にマタイ伝 7・12 に「さらば凡(すべ)て人に為(せ)られんと思ふことは、人にも亦(また)その如くせよ」、ルカ伝 6・3 に「なんぢら人に為られんと思ふごとく、人にも然(しか)せよ」とあります。また、『論語』顔淵第十二と衛霊公第十五に同じ「己の欲せざる所、人に施す勿(な)かれ」とあります。人類が二千年以上も言い伝えてきた言葉ですが、皮肉屋のバーナード・ショウは逆に「汝、人にせられんと欲する如く、その如く人にはするな。人々の趣味は同じでないかも知れぬ」と言いました。ショウの警句は「黄金律」と矛盾するようですが、よく考えてみると非常に正しいことを言っていると思います。何に対しても人には好き嫌いがあるし、私が美味しいからとそれを人に強いては迷惑でしょう。薬や民間療法もそうだし、まして私たちの慣習や制度を全く違う文化圏の人々に「いかがですか」と言ったところで、「ほっといてください」でおしまいですよ。ね。「黄金律」もショウも相手を思いやれと言っているのですよね、要するに。

ちなみに「今日できることを明日まで延ばすな Don't put off till tomorrow what you can do today.」という、これだけは反対する人はいないだろうと思われる警句にも、反対の警句？があります。トルコの諺らしいのですが「明日できることは今日するな Don't do now what you can do tomorrow.」というものです。あら、素敵。

今週のおすすめ

・ 佐瀬 稔 『挫折と栄光 世界チャンピオン浜田剛史の時代』 (主婦の友社)

スピード、テクニック、パンチ力、ディフェンスなど、ボクサーのうまさや強さを表す指標がいくつかあります。パンチ力はあるがディフェンスが弱いとかね。しかし浜田剛史はそういった物差しでは測れないボクサーでした。無類のファイターで、観ていて唯一恐怖を感じるボクサーでした。この本には、世界チャンピオンになると決めた男の生き方がよく書かれています。

実はこの本は 10 年以上前に読んだのですが、ボクシングとは関係のないエピソードで、読んだ時いたく感動したものがあります。浜田は沖縄の出身なのですが、父親が中学生の頃いよいよ本土決戦が近づき、自分たちも戦うことになったのです。すると配属将校の陸軍大尉が「すまない、ちょっと手落ちがあった。お前たちはまだ正式に軍への編入が認められていない。この書類に親の印鑑をもらってきてくれ。途中で空襲があったら終わるまで家にいろ。急ぐことはない」と言ったというのです。もちろん将校の嘘です。自分と一緒に連れて行けば確実に死ぬ。空襲で死ぬかもしれないが、その時はせめて家族と一緒に死なせてやりたいと、彼はそう考えたのです。将校の名前は書いてありませんが、何と立派な人物かと、私は忘れられずにいます。

BGM は Julie London の *Fly Me To The Moon* でした…。